

判断する力を育てる社会科学学習

名古屋市立汐路小学校教諭 石 原 孝 裕

I 研究のねらい

現代の情報化社会では、膨大な情報の中で判断をしていく必要がある。先の衆議院選挙では、投票先の選択に AI を利用する動きが報じられ、人々が判断に難しさを抱えていることがうかがわれた。文部科学省「生成 AI の利活用に関するガイドライン」では、最後は人間が判断し責任をもつ姿勢が重要であると示している。また、小学校学習指導要領解説社会編の教科の目標に「選択・判断したことを適切に表現する力を養う」とあり、社会的事象について判断し、その理由を述べることが求められている。こうした背景から、AI 時代を生きる子どもたちに「判断する力」を育てることは重要性を増していると考ええる。

私の考える「判断する力」とは、「社会的事象について、習得した知識を適切に用いて答えを決定する力」のことである。「習得した知識を適切に用いて答えを決定する」とは、習得した知識の中から答えを決定する理由として、業績（人物の働き・政策）を取り上げ、その理由を説明した上で答えを決定することである。私はこれまでも、「判断する力」を育てるために、「答えをどちら（どれ）に決定するか」という学習問題を設定して授業を行ってきた。しかし、多くの子どもは、答えを決定した理由に業績を取り上げて、それは羅列にとどまっていた。これは業績について知識の習得が不十分であることや、答えを決定するにあたってどの業績を取り上げて考えればよいのかが分からなかったことが原因だと考えた。

北俊夫氏『新社会科の指導と評価』（明治図書、2017）では、「判断する」とは、「AとBのどちらを選択するか」など「選ぶ」「決める」行為であると述べている。また、判断力の構成要素として「観察力（事実認識）」「思考力（意味の理解、概念化など）」「意思決定力（選択・決定）」を挙げ、これらは判断力を発揮する際の手続きであると述べている。さらに、判断するためには、知識を習得していることや、判断の基準を設定すること、友達の考えを聞いて考えをより確かにすることが重要であると述べている。

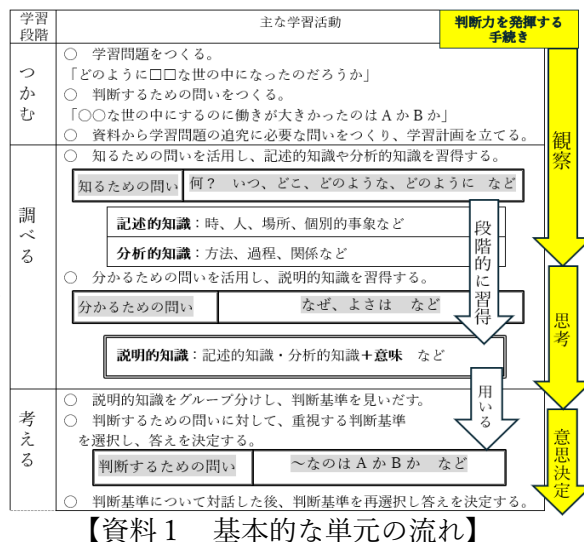
そこで本研究では「観察→思考→意思決定」の判断力を発揮する手続きを学習の流れとして位置付け、知識を習得する活動や判断する活動に工夫をすることで、「判断する力」を育成していく。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立汐路小学校
第6学年 34人

2 基本的な考え

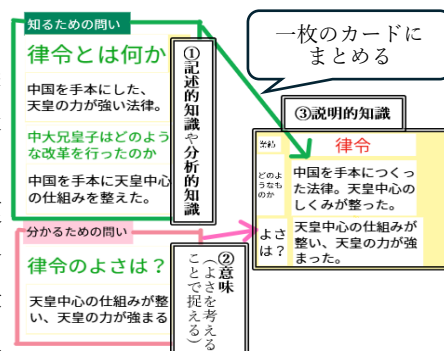
学習問題を設定して、必要な知識を習得し、習得した知識を用いて判断する、という学習を行うために「つかむ」「調べる」「考える」の三つの学習段階を設定する。また、学習段階の中に、「観察→思考→意思決定」という判断力を発揮する手続きを位置付ける。さらに、問いを分類して活用することで、段階的に知識を習得し、習得した知識を用いて判断できるようにする【資料1】。



まず、「観察」では、社会が変化した様子が分かる資料から疑問をもち、学習問題を設定する。あわせて、変化に関わった人物の年表を比較して、「どの人物が、変化に対する働きが大きかったのか」という疑問をもった上で判断するための問いをつくる。これを学習問題のサブテーマとする。そして、知るための問いを活用して、個別の事実に関する記述的知識と、方法や過程に関する分析的知識を習得する。次に、「思考」では、分かるための問いを活用して、記述的知識や分析的知識に意味が加わった説明的知識を習得し、そこから判断基準を見いだす。最後に、「意思決定」では、判断するための問いに対し、どちらの判断基準を重視して答えを決定するか選択し、対話後、判断基準を再度選択して答えを決定する。

(1) 調べる活動における問いの活用の工夫

つかむ段階では、まず、子ども一人一人が社会的事象に対する疑問から、知るための問いや、分かるための問いを複数つくり、学級で共有する。次に、調べる段階では、子どもたちの問いの中から、学習問題の解決に必要な業績について調べられる問いを教師が複数選ぶ。これらを全員が調べる問いとして設定する。子どもは自分でつくった問いや、全員が調べる問いを活用して調べていく。具体的には、「知るための問い」を活用しながら社会的事象について調べた後、「分かるための問い」を活用しながら、業績の意味を捉えるために業績のよさについて調べたり考えたりする。最後に、分かったことや考えたことを一枚のカードにまとめて記述し、友達と、「知るための問いで分かったこと」→「分かるための問いで分かったこと」の順に確認する。これにより、業績についての説明的知識を習得する。

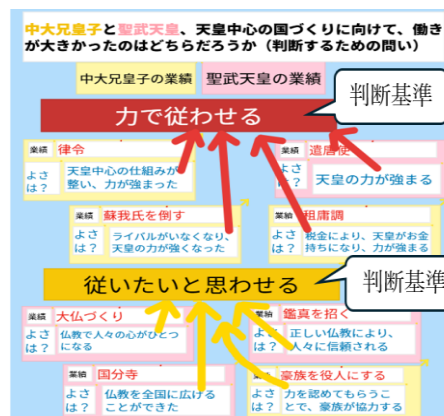


【資料2 知識習得の流れ】

このように、段階的に知識を習得できるよう、問いを分類して活用することで、判断基準を見いだすために必要な説明的知識を習得できると考える【資料2】。

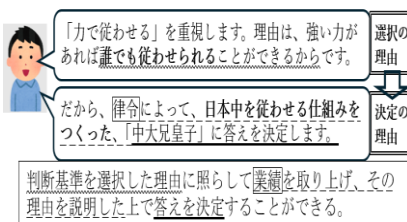
(2) 社会的事象に対して判断する活動の工夫

考える段階ではまず、次のような活動を行う。①学級全体で調べた業績を確認する→②業績のよさに着目してグループ分けするために、学級で話し合う→③それぞれのグループを表す言葉を考える→④その言葉を判断基準として設定する【資料3】。次に、判断するための問いについて考える際に重視する判断基準を選択し、その理由を考え、答えを決定する。その後、判断基準を選択した理由について学級で対話する。教師がファシリテーターとなり、子どもが述べた選択の理由や、反対する理由を板書して整理したり、話題を焦点化したりする。対話を通して、違う判断基準でも納得できる理由があることや、同じ判断基準でも理由が違うことなどに気付かせる。これにより、自分の選択した理由が揺さぶられたり、判断基準についてこれまで気付かなかった側面に目を向けたりすることになり、対話後に判断基準を再選択する際の理由が確かになる。最後に、判断基準を選択し直して理由を考え、答えを決定し直す。



【資料3 判断基準を見いだすイメージ】
※説明的知識は簡略化してある

このように、判断するための問いについて答えを出す活動に判断基準を設定することで、判断基準は答えを決定するための方向性を示し、業績は、その方向性に沿って答えを決定するための根拠として位置付けられる。また、判断基準について対話をして、再度選択することで、選択の理由が確かになる。これにより、確かになった理由に照らして業績を取り上げ、その理由を説明した上で答えを決定することができる。このような学習を通して、「判断する力」を育成できると考える。【資料4】。



【資料4 判断基準と答えの関係】

3 6月実践「天皇中心の国づくり」10月実践「武士の世の中へ」における学習展開

単元と目標	単元「天皇中心の国づくり」(10時間完了) 【実践のねらい】 天皇の力が強い国を築いた、聖徳太子、中大兄皇子、聖武天皇による天皇中心の国づくりについて調べ、それらの業績の説明的知識を習得できるようにする。習得した知識から「天皇の力を強める」「尊敬を集める」という判断基準を見だし、選択した判断基準を基に答えを決定することができるようにする。	単元「武士の世の中へ」(10時間完了) 【実践のねらい】 武士の世の中を築いた、平氏、源氏、北条氏による武士の世の中への変遷について調べ、それらの業績の説明的知識を習得できるようにする。習得した知識から「戦いで権力を握る」「法や仕組みでまとめる」という判断基準を見だし、選択した判断基準を基に答えを決定することができるようにする。
段階	主な学習活動(丸数字は時間)	
つかむ	① 聖徳太子の時代の大王の力の大きさと聖武天皇の時代の天皇の力の大きさを見比べ、天皇の力が強くなったことに疑問をもち、学習問題を設定する。 ② まず、天皇中心の国づくりには中大兄皇子と聖武天皇が関わっていたことや、それぞれの人物の主な業績を簡潔に示した年表から、天皇中心の国づくりにするには、どちらの人物の働きが大きかったのか、という問いをもち、学習問題のサブテーマとして設定する。次に、社会的事象に対する疑問や学習問題に対して解決したい疑問から知るための問い、分かるための問いをつくる。問いを基に、学習計画を立てる。 【学習問題】 どのように天皇中心の国づくりをしたのだろうか。 ～中大兄皇子と聖武天皇、天皇中心の国づくりに向けて働きが大きかったのはどちらだろうか～ <分類> ・中大兄皇子の業績 ・聖武天皇の業績(国内) ・聖武天皇の業績(国外とのつながり)	① 平安時代の武士の様子と保元の乱後の武士の様子を見比べ、貴族の世から武士の世の中へと移行したことに疑問をもち、学習問題を設定する。 ② まず、武士の世の中にするために、平氏・源氏・北条氏の働きが大きかったことや、それぞれの一族の主な業績を簡潔に示した年表から、武士の世の中にするには、どの一族の働きが大きかったのか、という問いを学習問題のサブテーマとして設定する。次に、社会的事象に対する疑問や学習問題に対して解決したい疑問から知るための問い、分かるための問いをつくる。問いを基に、学習計画を立てる。 【学習問題】 どのように武士の世の中になったのだろうか。 ～平氏と源氏と北条氏、武士の世の中に向けてどの一族の働きが大きかったのだろうか～ <分類> ・平氏の業績 ・源氏の業績 ・北条氏の業績
調べる	③～⑥ 学習計画に沿って調べる。その際、知るための問いと分かるための問いを活用して調べ、調べた社会的事象をカードにまとめる。 【検証場面1】	③～⑥ 学習計画に沿って調べる。その際、知るための問いと分かるための問いを活用して調べ、調べた社会的事象をカードにまとめる。 【検証場面1】
考える	⑦ 次の1～5のような活動を行う1. 学級全体で調べた業績を確認する→2. 業績のよさに着目してグループ分けするために、学級で話し合う→3. それぞれのグループを表す言葉を考える→4. その言葉を判断基準として設定する→5. 「働きが大きかったのはどちらか」という問いに対し、重視する判断基準を選択し、答えを決定する。 <予想される判断基準> 力で従わせる 従いたいと思わせる ⑧ どちらの基準を重視するか対話を通して自分の選択を見直し、最終的な答えを決定する。 【検証場面2】	⑦ 次の1～5のような活動を行う1. 学級全体で調べた業績を確認する→2. 業績のよさに着目してグループ分けするために、学級で話し合う→3. それぞれのグループを表す言葉を考える→4. その言葉を判断基準として設定する→5. 「働きが大きかったのは誰か」という問いに対し、重視する判断基準を選択し、答えを決定する。 <予想される判断基準> 戦いで力を強める 法・仕組みでまとめる ⑧ どちらの基準を重視するか対話を通して自分の選択を見直し、最終的な答えを決定する。 【検証場面2】

4 児童の実態調査

単元「子育て支援の願いを実現する政治」の「調べる」段階において、説明的知識を習得できているか、記述内容から調査する。また、「考える」段階において、答えを決定した理由として用いている事実について、羅列ではなく、どのような理由でその事実を用いたのかを説明できているか、記述内容から調査する。

5 授業研究を通して明らかにしたいこと

- (1) 「調べる」段階において、「知るための問い」と「分かるための問い」に分類して活用することは、説明的知識を習得する上で有効か、カードにまとめた記述の内容からつかむ。
- (2) 「考える」段階において、判断するための問いについて答えを出す活動に判断基準を設定することは、知識を適切に用いて答えを決定する上で有効か、学習問題のまとめの記述内容からつかむ。

Ⅲ 年間の研究計画

月	研究・調査・授業研究等
4	○ 実態調査を行う。
5	○ 研究主題の基本的な考え方を基に研究の方向性を定め、研究計画書を作成する。 ○ 第1次授業研究の授業研究計画書を作成し、検討する。 ○ 長期研修の日程を作成する。
6	○ 第1次授業研究実践単元「天皇中心の国づくり」 【検証点1】 「調べる」段階において、「知るための問い」と「分かるための問い」に分類して活用することは、説明的知識を習得する上で有効か、カードにまとめた記述の内容からつかむ。 【検証点2】 「考える」段階において、判断するための問いについて答えを出す活動に判断基準を設定して用いることは、知識を適切に用いて答えを決定する上で有効か、学習問題のまとめの記述内容からつかむ。
7	○ 第1次授業研究を分析し、基本的な考えを修正する。 ○ 中間のまとめを作成し、今後の研究の方向性を明らかにする。
8	○ 長期研修（A日程）研究先進校や先進研究者を訪問し、研究を深める。 ・敬愛大学 佐藤孔美氏 ・立命館大学 角田将士氏 ・島根大学 紙田路子氏 ・鹿児島大学 溝口和宏氏 ○ 第2次授業研究の授業研究計画書を作成し、検討する。
9	○ 第2次授業研究実践単元「武士の世の中へ」
10	長期研修で学んだことを基に授業改善し、【検証点1】【検証点2】を検証する。
11	○ 第1・2次授業研究の成果や課題、長期研修の成果や今後の研究の課題などを明らかにし、
12	最終報告書を作成する。
1	○ 「判断する力を育てる社会科学習」について、1年間の成果や課題をまとめ、発表する。
2	○ 1年間の研究を反省し、今後の研究の方向付けをする。
3	

参考・引用文献 北俊夫『新社会科の指導と評価』（明治図書 2017）